

国立国語研究所学術情報リポジトリ

ジャンル(談話種別)の分類課題

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2020-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 石田, 恵里子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002927

ジャンル（談話種別）の分類課題

ジャンルワーキンググループ（報告者：石田恵里子）

I. 課題

- ・総合シラバスの第3の軸とすることを目指しジャンル（談話種別）の列挙・分類を行う。この課題は、言語形式やタクティクスの選択に加え、スタイル（書きことばWG）、印象調査、生活ニーズ調査など、他の課題に広く関わる。
- ・ジャンルによって内容を調整する能力をつけさせる教育への貢献を目的として、なんらかの形で言語作品を分類・列挙する必要がある。
- ・ジャンルとして挙げる条件（総合シラバスでの方針：第3部会9年度第3回要録より）
 - ・日本言語文化内において社会的に一般に成立していると思われるもの。
 - ・学習対象として取り上げる価値・必要性のある種別。学習者が意識化すべきもの。
 - ・学習者が既習の行動レポーターの中から適切な要素を選択することを要求される程度まで細分。

II. 分類のための観点

「ジャンルは、談話コミュニティーによって認知されている、話しことば・書きことばの談話の種類である。例としては、講演、会話、スピーチ、通知、宣伝、小説、日記、買い物リストなどがあげられる。それぞれのジャンルには典型的な特徴がある。（中略）ジャンルを識別することは、コミュニケーションにとって重要なことであるが、満足いく分類がまだできていないのが現実である。しかし、特定のジャンルに関しては、詳細な研究があり、また関心も寄せられている。」

（「外国語教育学大辞典」大修館「ジャンル」の項）

- ジャンル研究の対象とされているのは、上記で挙げられた例の他に、ニュース、選挙演説、実況中継、裁判、教会の説教（以上話しことばの例）、看板、報告書、使用説明書、小説、新聞記事（書きことばの例）……などであり、いずれも場所、社会的役割関係、その他の場面構成要素がセットになっており、出来上がった言語作品も定型化している。
- 言語作品の分類が難しい一因は、ジャンルだと言われるものそれぞれに様々な場面構成要素が複雑に絡み合っており、様々な観点からの分類が可能であることだと思われる。
- 場面構成要素の束が固定できないため上記のような典型的ジャンルを挙げていくだけでは捕まえにくいことばのやりとりの中にも、型をもったまとまりが存在すると思われる。運用能力向上のために、「一般的な会話」をも一つにくくらず、あらゆる実例を分類・整理できるような観点が望まれる。

「具体的な談話を観察し、経験するということを通して学習するのがいちばんまっとうな行き方であろう。こういうときはこうする、と知識で入れていくと実際の行動能力に結びつかない恐れがある。それより具体的な談話に次々接することにより、今見た談話はこの種類であったからこういう言い方をしている、という伝達行動上の特徴に注目する習慣を形成するのが正当な学習のしかたであろう。」(第3部会9年度第3回要録より)

Ⅲ. 作業方針 (談話の機能に注目する)

→ワーキンググループでは、書かれた・話された談話のまとまりを「ある機能を果たす言語作品」として捉えようとしている。ここでいう「機能」とは、具体的には「情報を提供する」「勧める」など<談話全体が果たす目的>のことで、実現形態が談話中で果たす機能(タクティクス)とは別の意味で使っている。

→言語場面を構成する要素は、選択肢の中から選ばなければならないもの・気を配るべきものである。様々な研究でそういった要素を系統立てて整理する試みが行われている。例えば杉戸(1999)では「①内容・話題 ②時機・タイミング ③場所柄・状況 ④行動主体 ⑤行動相手 ⑥言語の調子 ⑦言語形式 ⑧媒体・道具 ⑨談話の組立て ⑩言語行動の機能(杉戸1999. p1)」が、「例えば」として挙げられている。

→ワーキンググループでは、言語行動の実態をつかむ一つのアプローチとして「目的」を一つの軸(定数)とし、もう一方の軸に場面性を作る構成要素(変数・バリエーションをもたらす要因)に持つてくるというイメージを考えている。目的を軸とした場合、交差している他の要素の特にどれにハイライトが当たるか、要素のファクターが変わると実現形態の選択がどう変わるか、などが異なってくるだろうと考えられているからである。

→コミュニケーション能力を養成する際、言語形式(語彙や表現の単位)と機能とを密接に対応させて学習していく段階から、さらに大きなまとまりで目的を果たしていく能力を身につけるステップがある。最終的な段階では、一般的に受け入れられやすい言語形式・構成を用いてタスクを遂行していく能力と、まとまりとしての伝達内容(何をしようとしている談話なのか)を、スキーマに照らし合わせて解釈する能力が必要である。

「例えば‘勧誘をしよう’というときに、その範囲に収めることができるかどうか。依頼でもなく要求でも命令でもない‘勧誘’というテリトリーを守っているかどうか。そしてその中でよりよい勧誘が実現できているか。他の種類の言語行動との対比というか、それにとって何が必要なことであるのか、ということ。これは、語形の選択というのが大きいと思うが、話の進め方であるとか、ノンバーバルなことなどがいろいろ絡んでいるだろう。」

(第2部会9年度第2回要録より)

→しかしこれは一つの分類手順であり、現実の場面で常に機能選択が先行し他の要素を規定している、と主張するものではない。出来上がった分類を「ジャンルの種別」と呼ぶことに無理があれば、「言語作品種別」「言語作品の伝達機能の種類」など、後から変更可。また、「特に機能と呼べるものが見出せない談話」というのも一つのカテゴリーとなりうる。

IV. 作業内容と問題点 (トップダウンとボトムアップ)

1. トップダウン

①作業内容：話された/書かれた作品について「このような機能を果たしているものが存在する」と思われるものをリストアップしていく。

②問題点：

- ・機能のラベルのつけ方。(言語内容に忠実な名づけ(例：情報を伝える、心情を吐露する、など)、意図や効果を含んだ名づけ(例：励ます、おだてる、ねぎらう、誘導尋問する、冗談を言って笑わせる、など)、場面的な名づけ(例：訪問する、自己紹介する、ダンスの指導をする、など)と性格の違った名づけ方が混在している。)
- ・書きことばと話しことばのアプローチのずれ。
- ・同じことをするのに、書きことばではこういう作品でこのように書く、話しことばはこういう作品でこのように話す、と対応させ、共通理念で整理することができるか。
- ・「いわゆるジャンル」を組み入れることをどの程度念頭において名付けるか。(スピーチ：公の場で多数の相手に対して考えを述べる、会議：相談して結論を出す、使用説明書：特定のものの使い方を説明する、など)

2. ボトムアップ

①作業内容：談話作品を区切り、「何をしているまとまりか」で名前を付ける。(＋何が機能認定のカギになったか探る。)具体的資料は現在のところ映画やドラマのシナリオ。

②問題点：

- ・機能のラベルの名づけ方(統一性・長さ)。
- ・誰の立場から見るか。
- ・いくつかの意図の複合(一談話一機能ではない場合)、表裏(見えていない意図)
- ・はじめの意図からずれていく場合(はじめの機能か、結果の機能か)
- ・ノンバーバルな行動との組み合わせ(文句を言っているが愛情がこもっている、など)
- ・ドラマ分析になりすぎないように。(どれだけ前提を考慮に入れるか。)
- ・どう区切るか。(タクティクスの単位との境界)

話題が変わった、機能が変ったという解釈は母語話者にもバリエーションがあり一貫した根拠を見出すことは難しい。

- ・作業間での解釈・手がかりの違い。

機能認定の判断にも個人差がある。また、どこに着目して意図を汲んだか、何を決め手にして判断したかも違う。(表情・言い方・前提など。語形式がはっきり機能をあらわしていればよいが、そうでないものも多い。)

→しかし、作業間での判断の違いは、それ自体有用な資料になる。

3. 突き合わせ：トップダウンとをどう突き合わせるか。

言語内の情報およびさまざまな場面構成要素の中から機能認定に直接関わる条件を挙げてマトリクス化することを試みる。果たしている機能を名づける際には、言語内容のほかに、相手(受信者)などの条件をどうしても考慮に入れなければならないからである。

まずは、国研(1994)で紹介されている談話種別「関說的談話」「情動的談話」「動能的談話」「交話的談話」などに分けて考えようとしている。

(以下、マトリクスの条件の例。分類条件の順序付けは行わず、各条件からソートできるようにしたい。)

◎伝達情報内容を持つか (－：独り言、掛け声、叫び、…)

<情報伝達群(関說的談話・情動的談話)の機能に関わってくる条件>

◎特定の相手に伝える(+) / 不特定の相手(一般大衆)に伝える(-)

(－：ニュース、天気予報、コマーシャル、昔話、小説、…)

◎発信者・受信者の数(一対一、一対限定された人数、一対多、多対一、多対多…)

◎受信者からの応答を期待しているか(フィードバックの想定度。対話-独話…)

◎情報は受信者にとって必要なことか(受信者が知っておくべきことだ、と発信者が信じているかどうか。)

◎情報は客観的な言語外事実に関するものか、主観的な内容の表出(心情など)か

<行為要求群(動能的談話)の機能に関わってくる条件>

◎受信者の反応として具体的行動を期待しているか(相手を動かすことを意図しているか。)

◎行為要求が+の場合、発信者は受信者を動かさうする権限・根拠があるか(あると発信者が信じているか)

◎受益者は誰か(発信者・受信者どちらの利益のための談話か。発信者・受信者・両方・受益者なし)

◎その談話によって実現される行為は誰が実際に行うか

(例：行為者が受信者であれば、依頼・指示・勧め…、発信者ならば許可の要求、行為の申し出…、両者であれば、勧誘)

<その他の条件>

◎「ことばを交わすこと」自体に意義があるか。関係形成・保持のための交話的談話としての機能があるか。(＋：あいさつする、おしゃべりする、手紙、交換日記、…)

◎前提となる文脈があるか。(＋：質問→説明、意見→反論、依頼→断り…)

◎儀式としての存在意義があるか(＋：開会宣言をする、任命式で任命する、賞状…)

<書きことばに関する条件>

◎記録(保存用)としての機能があるか。

(＋：目録、証書、領収書、レシート、控え、会議録、日誌、連絡帳…)

◎情報整理としての機能があるか。(＋：メモ、索引、買物リスト、…)

